

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和8年度 第1号 2026年9月30日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
函館水産試験場 調査研究部
TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和8年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1次調査）結果

函館水試試験調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2026年8月29日～9月4日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を上回った
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は、恵山沖及び鹿部沖
- ・ 魚群反応の強い深度は、水深250付近及び450m付近
- ・ 水温は、渡島沖では水深100～180mにかけて、胆振沖では水深130～200mにかけては平年よりもやや低かった

1. スケトウダラ成魚とみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも渡島海域の196漁区（恵山沖）及び189漁区（鹿部沖）にやや強い魚群反応がみられました（図1）。なお、本年度の調査では、時化のため、日高沖の一部の調査線（R～V線）では残念ながら魚探観測は実施できませんでした。
2. スケトウダラ成魚とみられる魚群の分布深度は、主に水深200mより深場に形成されていました。その中でも水深250m付近及び450m付近に比較的強い反応がみられました（図2・4）。なお、渡島～胆振海域（とくに渡島沖のC～F線にかけて）の水深150～200m付近には、やや強い魚群反応がみられましたが（図2の赤線で囲まれた範囲）、この反応はスケトウダラ成魚ではなく、未成年魚主体の反応と考えられます（成魚とみられる反応は図2の青線で囲まれた範囲）。
3. 渡島から胆振沖にかけての平均反応量は、前年同期をやや上回り、2023年度と同程度の値となりました（図3）。なお、平均反応量は成魚の反応を対象としているため、図2の赤線で囲まれた未成年魚の反応は除いています。
4. 本年度の調査では、トロールによる漁獲物調査も実施できませんでした。前年度末（2026年2～3月）に実施した沖底漁獲物の測定結果では、2月及び3月の漁獲物ともに尾叉長35～40cmの占める割合が高かったことから、今年度の漁獲物は尾叉長40cm前後の小型個体の割合が高いものと考えられます（図5）。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（D線沖の観測点）では水深100～180mにかけて、胆振沖（H線沖の観測点）では水深130～200mにかけて、平年（2002年度以降の平均値）よりもやや低く（ -2.0°C 前後）なっていました。スケトウダラ成魚の生息に好適とされる 5°C 以下の水温は、渡島沖では水深200m以深、胆振沖では水深150m以深となっていました（図6；水温観測地点は図1右上図参照）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11月）の状態を予測するために実施しているものです。12月以降の状況は、11月中旬に実施する分布調査（2次調査）により予測する予定です。調査終了後に改めてスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

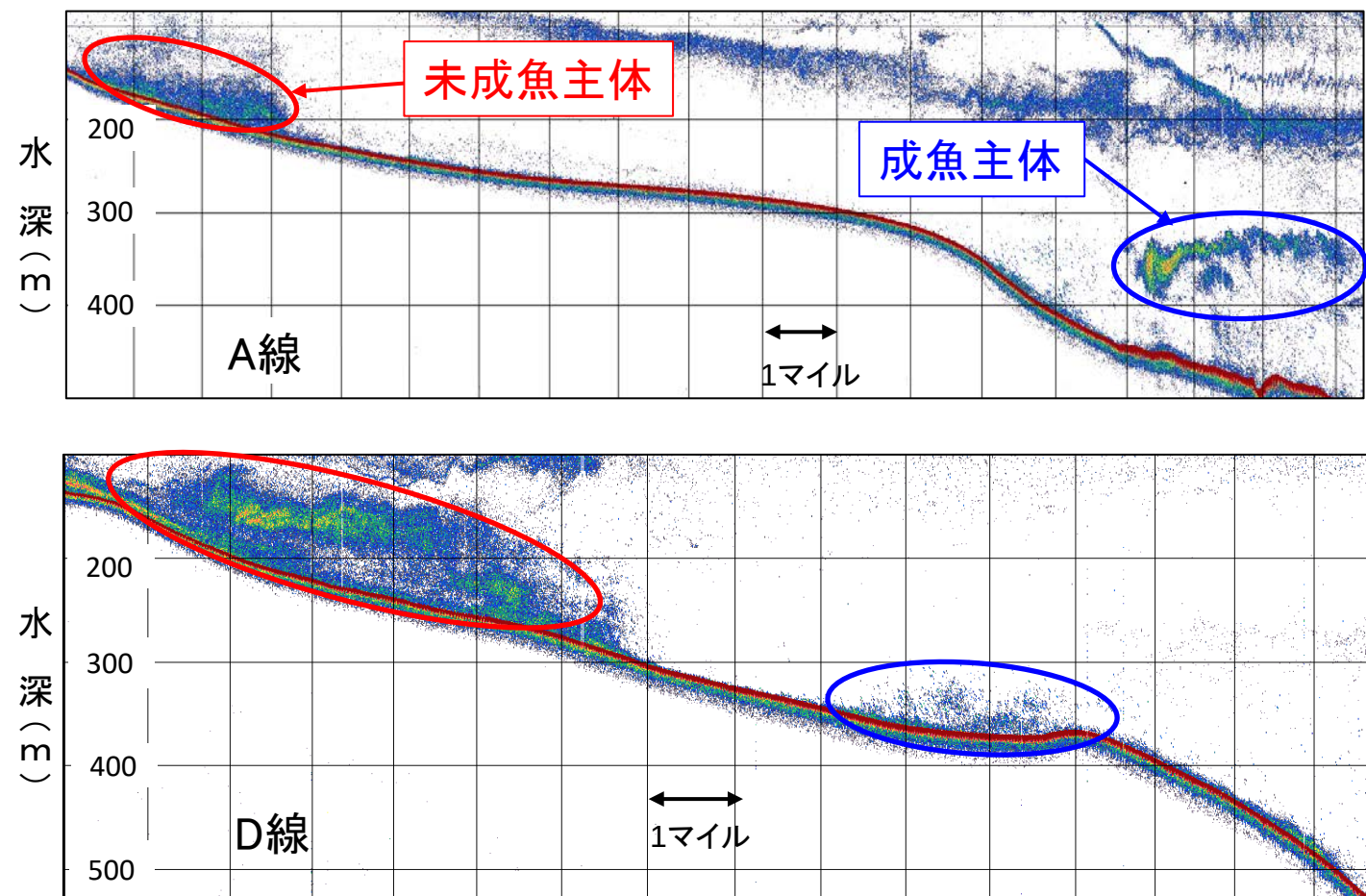
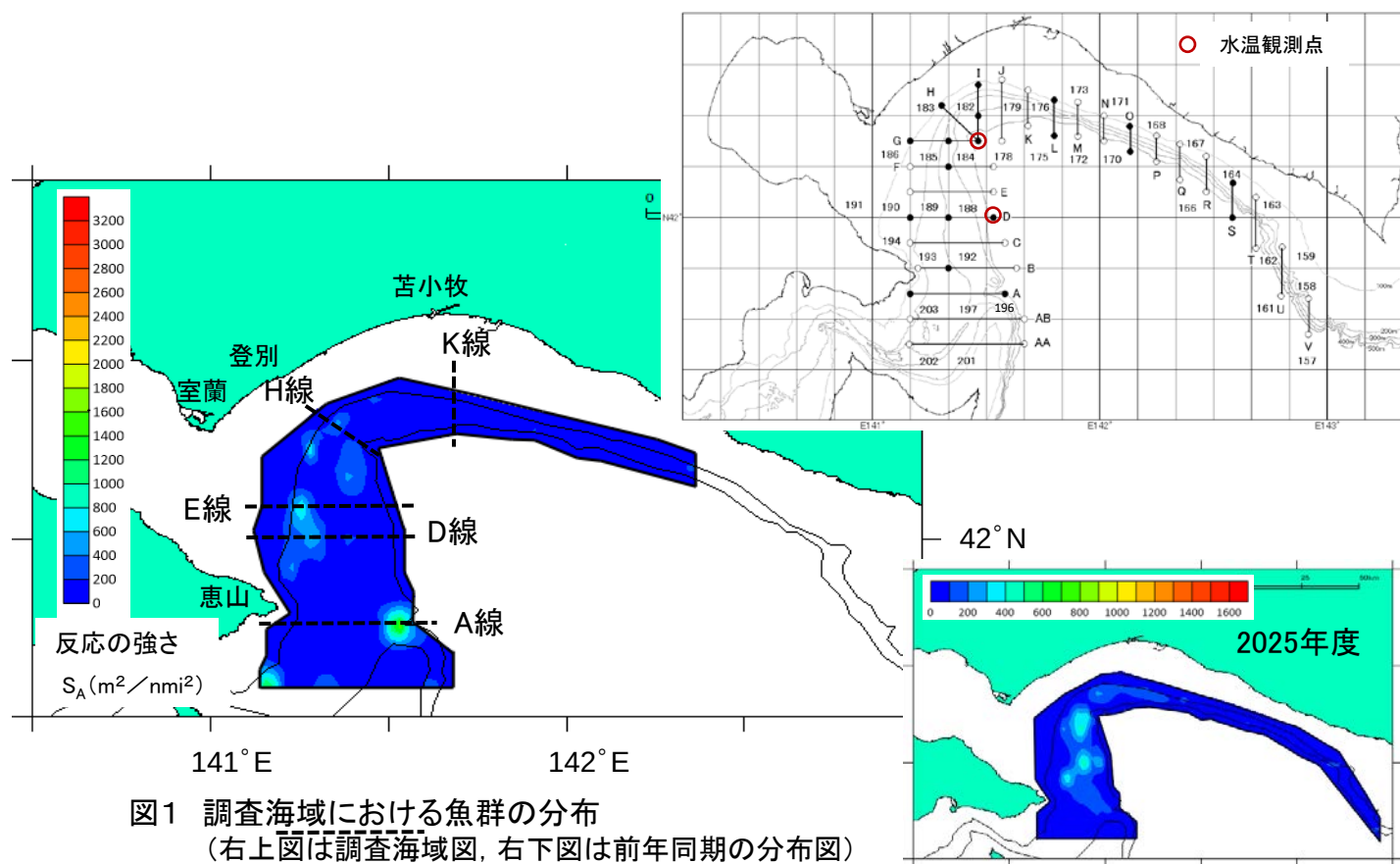


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

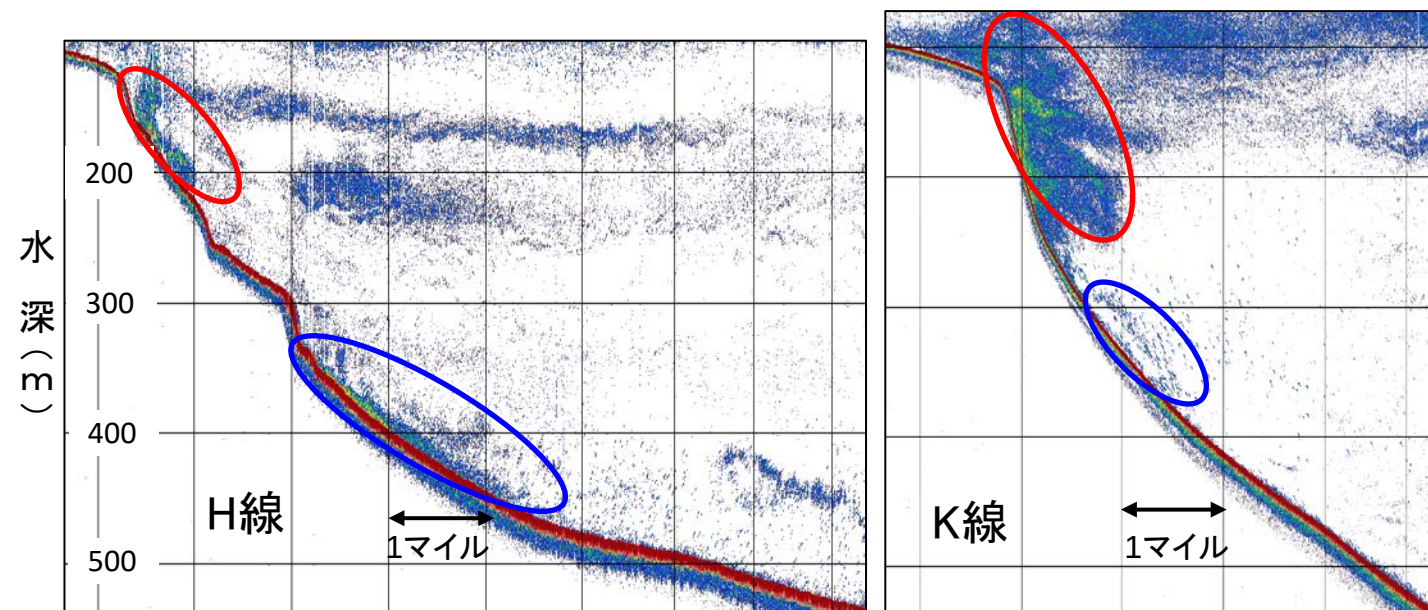
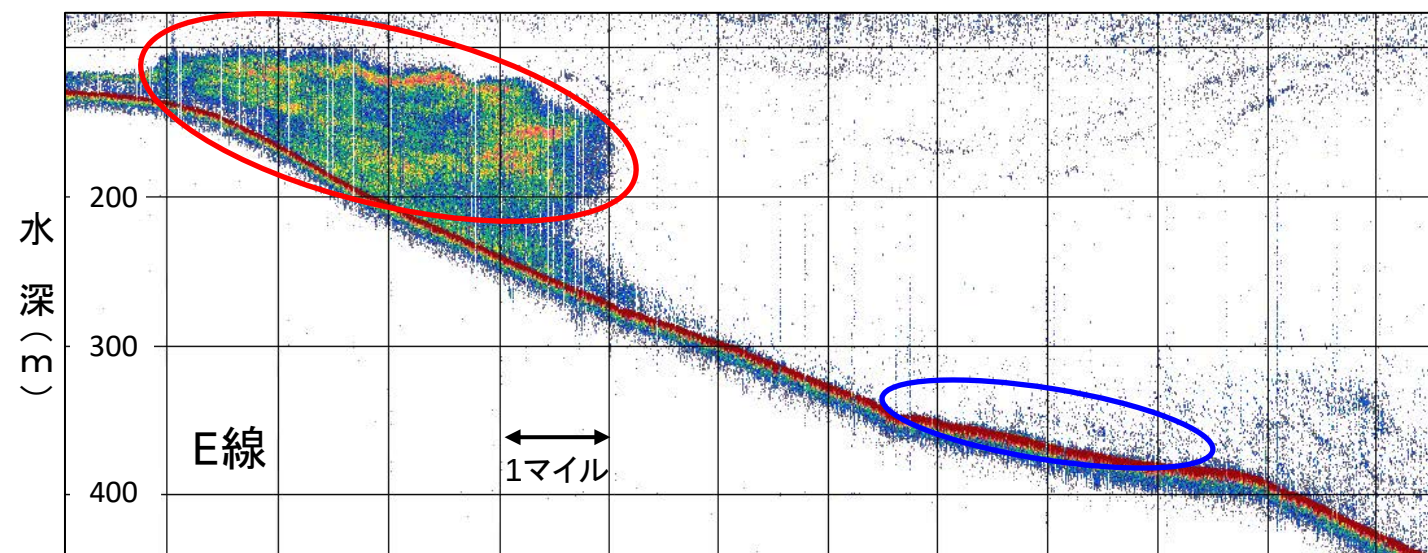


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

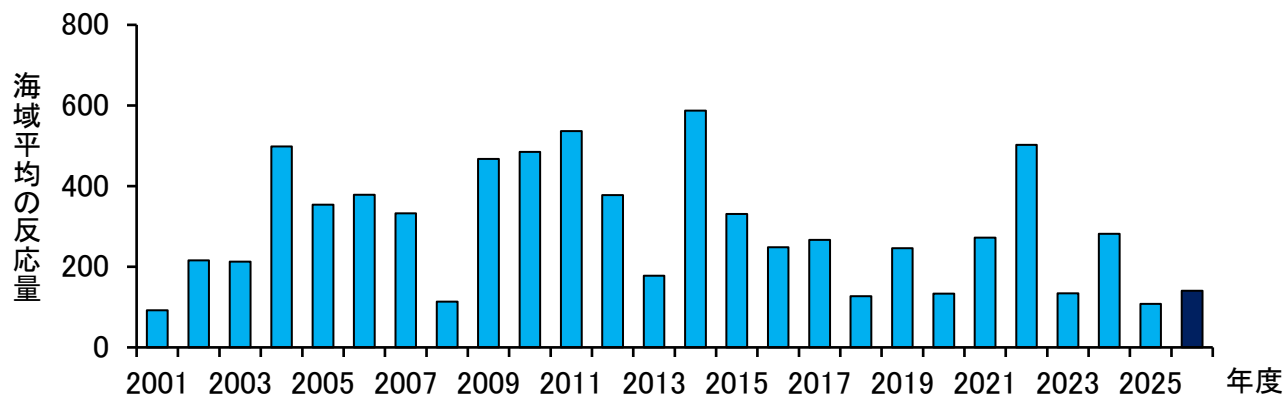


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

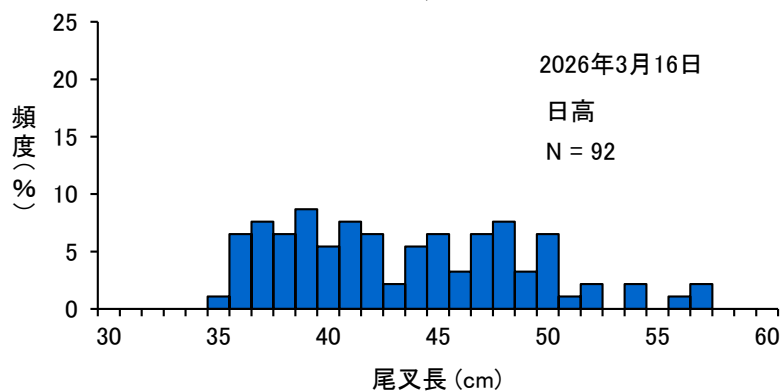
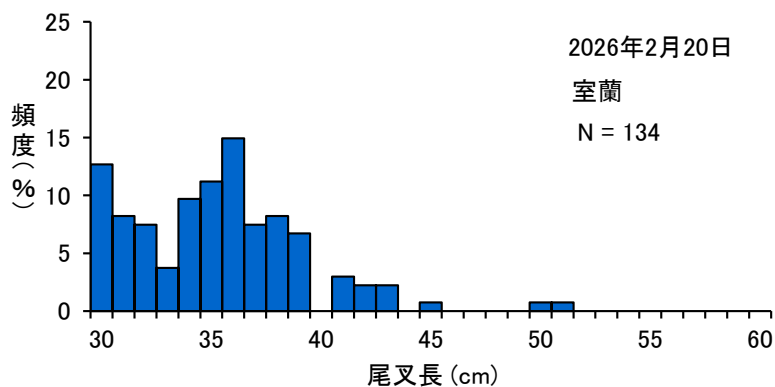
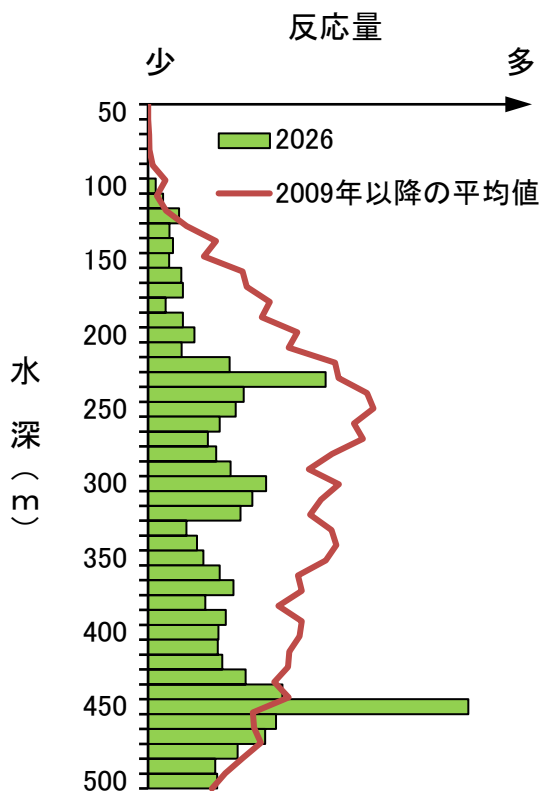


図4 水深別(10m間隔)の魚探反応量

図5 2026年2～3月に実施した
沖底漁獲物の体長組成

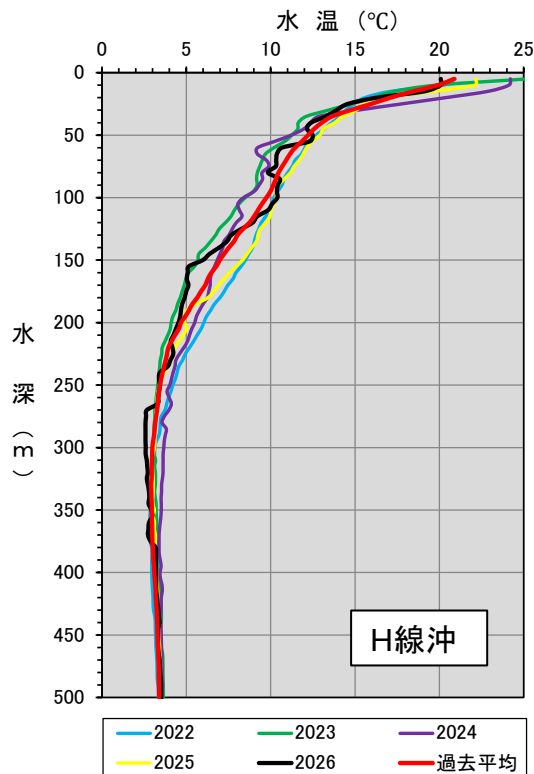
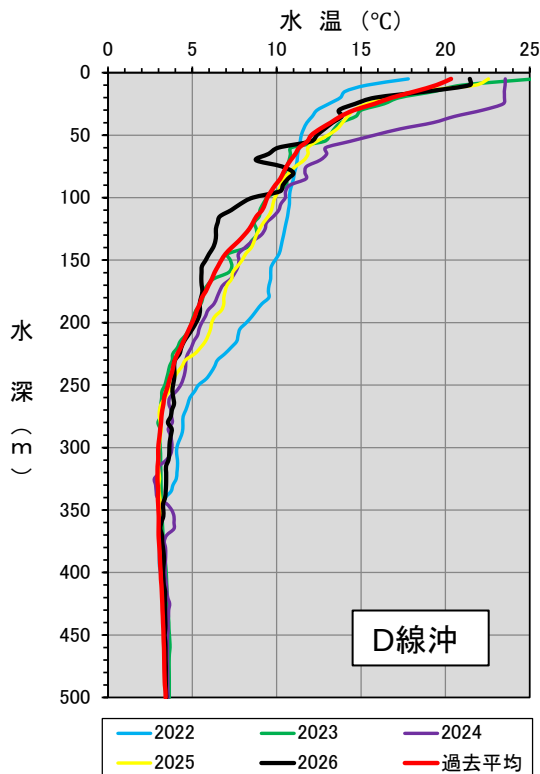


図6 8月下旬における水温の鉛直分布
左:南茅部沖(D線上), 右:登別沖(H線上)
(過去平均:本調査における2002～2025年度の各調査点の平均値)

※この調査の一部は、水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。